

禁室をテーマとする物語完成法にみる関係の問題

青 木 真 理

The Problem of the Relationship in the Story-Completion-Test with the Theme of Forbidden-Room

AOKI Mari

1. 序

筆者（1988）は禁室モチーフを持つ昔話をもとにした物語完成法を用いてその反応を年令間、日米間で比較検討した。その中で特に注目すべきテーマとして関係の“断絶”と“修復”が浮かび上がった。本論では、日米の小・中学生の反応の実例に即して、このテーマについて考察したい。

2. 物語の完成

用いた物語は、日本昔話の「うぐいすの里」をもとにしたものである。「うぐいすの里」は関敬吾（1978）の分類によれば「見るなの座敷」型に属する。主人公の木樵が初めて訪れた屋敷でその家の女性に留守番を頼まれ、引き受ける。ただし、ある一室だけは見てはいけないと禁じられるのだが、留守を守る間、好奇心に駆られてその部屋をのぞいてしまう。するとその部屋にいたうぐいすが飛び去り、屋敷もすべて消え去るという話である。筆者が物語完成法テストとして用いた刺激材料は、この昔話の中で主人公が禁じられた部屋を開けてしまうところで話を切断したものである。その際場所を特定する表現は省き、中立的な文体になるように、修正を加えている。刺激材料は、日本語版と英語版の2種類作成した。被験者は、その結末を完成させることが求められる。被験者は、日本の小学3、4年生70名（平均年齢9.2才、男子34名、女子36名）、日本の中学生73名（平均年齢13.5才、男子37名、女子36名）、米国の小学3、4年生（平均年齢8.5才、男子25名、女子23名）、米国の中学生66名（平均年齢12.5才、男子37名、女子29名）である。全部の反応を検討した結果、禁じ手の女性と禁の侵犯者たる木樵との関係に基礎をおいた9つの類型が得られた。次にすべての反応がこの9つの範疇に分類された。そして、各群間で、反応の出現が比較検討された。

表1 反応の類型

型	方向性	典 型 例
A	とりこまれ	主人公の死・囚われ。
B	遠心	脱出・逃走。
C	破壊	禁じ手との戦い。 禁じ手を束縛するものから禁じ手を救済する。
D	関係断絶	追放。
E	関係修復	禁じ手が去る。 関係断絶の後修復。 関係は悪化するが明確な断絶を経ず関係が回復する。
F	関係逆転	禁じ手を主人公が諫める・叱る。
G	転換	夢または一時的な不思議体験。
H	平衡状態	禁侵犯が露見しない。露見してもとがめられない。
I	不明・逸脱	結末が不明。

表1に掲げたのが、反応の類型である。各型について簡単に説明しておきたい。

A型においては、禁の侵犯の結果待っているのは、禁の侵犯者に恐怖の念を起こさせるものである。それに対して侵犯者は無力であり、何等有効な策を講じられない。この恐怖の対象に対してどのように対処するかで、反応の在り方が違ってくる。恐怖の対象から脱出するか、あるいはこの恐怖対象と対決して戦うか。前者がB型であり、後者がC型である。B・Cという2つの型は、A型を基本とし、それに対する対処という方向に発展したものだと言えるだろう。

以上の3つの型は、主人公が好奇心に導かれてのぞくところに思いがけない恐ろしいものを見てしまったという、言わば出来心が思わぬ恐怖体験を引き起こすというものである。禁を犯したことによる禁じ手との関係の変化や、禁の侵犯そのものの意識化は、必ずしも明確ではない。それに対して、禁じ手と禁侵犯者との関係そのものが問題になっているのが、D型及びE型である。換言すれば禁とその侵犯に関する倫理が問題になっている。D型では、禁の侵犯によって、関係が断絶する。E型は禁侵犯によって断絶してしまった関係、もしくは断絶の危機にある関係が、修復されるというものであり、原則的にはD型の発展形と言えるだろう。原則的に、と述べたのは、後で例を挙げるが、日本の反応の場合、断絶の危機の表現が希薄なままに、関係が修復されることがあるからである。

B・Cが、A型を基本とし、どう対処するかという方向に発展したものと述べたが、D型もまた、底のほうにはA型的な恐怖を潜在させていると思われる。いかなる対処も及ばない根源的な恐怖対象というものが、B・C型と同様D型の中にも存在している。ただA型とD型との違いは、D型における恐怖の存在は、禁侵犯者を有無を言わず死に至らしめるような存在ではなく、禁の侵犯という出来事そのものを言語的に取り上げ、その結果としての関係断絶を生じさせるという点である。

E型は、必ずしも、根源的な恐怖対象を抱いているとは言えない。D型の発展形としてのE型は、償いによって赦しが得られるというものである。しかし、禁じ手の怒りと、それに対する侵

犯者の恐れが明確でなく、赦しへの方向性が最初から開かれているE型もある。Fは禁じ手と禁の審判者の力の優劣あるいは善悪が逆転しているもので、非常に少数である。特異な反応で興味深い、本論の目的からはそれなので特に取り上げない。

さて、A型からE型までは、禁じ手と侵犯者との間に何らかの関係が生じるが、G・H・Iは関係が生じないか、生じるとしてもその関係が希薄なものである。これらは一般的には課題の心理的負荷を軽減しようとする反応であると考えられる。この物語完成という課題が持つ“無理に部屋をのぞかせる”という強制的な側面が、抵抗感を生み、“浅い”反応で防衛しているのだと考えられる。これらは、この物語完成法が強い課題が大きな心理的負荷を生むことの証拠である。また、“関係が生じる”反応（AからEまで）の裏の反応とも言え、これらの検討も興味深いところであるが、本論では取り扱わず、関係の生じる反応に限って検討を行う。

3. 日米小・中学生の反応特徴概観

次に米国・日本の小・中学生の反応の特徴について述べたい。図1から図4までに、各群における反応の種類の分布をプロフィールで示した。図1は小学生における日本群・米国群の比較、図2は男女別の4群間の比較、図3は中学生における日米両群比較、図4は中学生男女別の4群間比較である。

小学生のプロフィールは、日米間で、A・B・C型については大きな差は見られなかった。A型よりやや少ないがほぼ同程度にB・C型が存在している。恐怖存在の力は大いには違いないが、それからの脱出も、それとの戦いも、同程度に見られる。日米に差異が見られるのは、倫理が扱われる型においてである。米国の小学生ではD型が多く関係断絶が強調されているのに対し、日本の小学生においてはD型も出現しているが、E型つまり関係修復がそれを上回る。この関係修復が強調されることは米国に比した日本の特徴かと思われる。日本の小学生は、関係の断絶に敏感である。

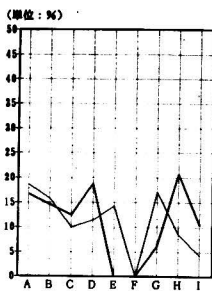


図1 小学生

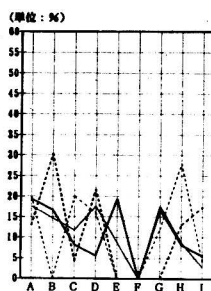


図2 小学生男女別

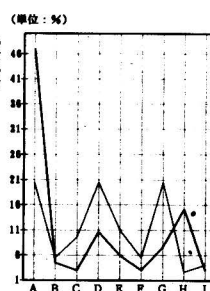


図3 中学生

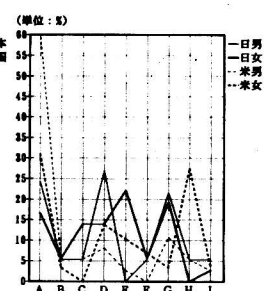


図4 中学生男女別

性差を見ると、米国においては男子のC型と女子のB型がちょうど逆転現象を示し、日本においては男子のD型と女子のE型がやはり逆転している。この二つの逆転現象は、女子集団の日米差を中心に考えると了解しやすい。つまり、女子は男子とは違い、禁じ手の女性に対する同一視がおきやすい。男子は禁じ手を木樵に対立する存在と見て、木樵だけを中心に、割り切って考えることができるが、女子は禁じ手にも共感を寄せる可能性がある。その共感の部分、言い換えれば割り切れなさが、B型とE型に現れていると思われる。日本の場合は、関係を保持したいという欲求がベースにあるので、関係断絶からE型すなわち関係修復にスライドしやすい。米国では関係断絶は、禁じ手の性を越えた力動が働いているため、女子と男子に性差が生まれにくい。その分、米国女子の“割り切れなさ”は、対象から遠ざかるというB型の増加に現れたのではないかなと思われる。

中学生のプロフィールを見ると、A型に比べてB・Cが小さい。このことは米国において特に顕著である。小学生3～4年生ではある程度抑制され、操作も可能であった恐怖存在が中学生期に再び盛り返す。恐怖存在に対し、脱出、対決、どちらの対処の方法も無力になる。中学生期は内的変化、殊に衝動的な面に揺り動かされる時期である。恐怖存在もそのような内なる衝動の増大と理解しえよう。そして、小学生までで獲得されていた解決方法がもう役に立たないということが、このA型の増大とそれに伴うB・Cの減少に示されていると思われる。

米国においてA型の突出傾向が顕著であることについては、はっきりと理由を示すことはできない。ただ、小学生で相当数出現していたD型が減少していることから、倫理的な抑圧の力も弱まっていて、それがA型突出を更に促進していることが推察される。このことは年齢的特徴なのか、社会全体の変化の現れなのかは、判別しがたい。

日本の中学生ではD型がA型の突出を抑えている。小学生期では関係修復が強調されるが、中学生期においては関係断絶が関係修復を上回る。

中学生期の性差の特徴は、米国においては、男子はA型の割合が特に多く、他の型については殆ど言及できないほどである。女子はB型に関しては男子との差が殆どなくなったが、B型の減少分が関係修復のE型と平衡型のH型に分散した。中学生においても禁じ手が同性であるが故の複雑さはあるが、B型という逃げる一方の未熟な対処ではなく、関係修復という新しい道を選ぶか、あるいは禁じ手・禁侵犯者のどちらにも深く関わらない平衡型という無関心かつ防衛的な反応をするかしたのだと考えられる。日本の場合の性差は、小学生期の性差と、基本的に同一である。

以上、日米の小・中学生の反応の特徴を述べたが、日米の大きな差異は、関係断絶と関係修復の問題にあると言ってよい。実例を取り上げながら、考えてみたい。

3. 関係の断絶

まず関係断絶の米国の例から挙げて検討する。

反応例1 米国8才女子

When he opened the door, there was a book. He opened the book and found a key to

a door, and he found the door that the key fitted into. Then the woman came back and found the man. The woman said to the man, "I can't trust you, can I?" And the woman told the man to get out of the house. And so the man went home sadly.

(日本語訳) 彼が戸を開けると本があった。その本を開くと、戸の鍵があり、彼はその鍵の合う戸を見つけた。すると女の人が帰って来て男を見つけた。女の方は男に言った。「あなたのことは信頼できませんね。」そうして女の方は男に屋敷から出て行くように言った。そこで男は悲しみながら家に帰った。

ここでは、関係の断絶が、禁じ手からの“追放”として描かれている。キーワードは信頼(trust)である。禁室を開けるという行為により、木樵は禁じ手との信頼関係を破壊したと評価され、その結果与えられたものは、追放という処罰であった。アダムとイブが禁じられた木の実を食べたために神から樂園を追われるというエピソードが連想される。この例と日本の関係断絶の反応例とを比較してみたい。

反応例2 日本8才男子

(部屋の中に花が咲いている。女は帰って来て)「部屋をのぞきましたね」といいました。そしたら女の方はまほうつかいになってとんでいきました。そしたら、見たことない家がきえてしまいました。きこりはあわてて自分の家にかえっていきました。次の日、きこりは、ねつをだしてしまいました。そして、きこりは、家のあったばしょにちかづきませんでした。

ここでも禁じ手と木樵との間の関係は断絶している。ただし、禁じ手はなんら罰を与えることなく、ただ自ら木樵の元を去る。信頼を裏切ったと咎める言葉もなく、この家を出て行けと追放されもしない。反応例1とは逆に、禁じ手と家が消えてしまうのである。

この反応は、この物語完成法のテキストの原型である「うぐいす里」の結末と構造的に近似している。原型では禁じ手がうぐいすになって飛び去り、反応2では“まほうつかい”になって飛んでいくという点は違うが、禁じ手自身が消えてしまい、禁侵犯者には直接的な処罰がないと言うところが、原型と共通する。

原型では、うぐいすの化身である女性が姿を消したその後のことは書かれていないが、この反応では、女性が姿を消すという形で関係の断絶が木樵にどのような影響を与えたかが書かれていて興味深い。木樵は「あわてて」家に帰る。そしてその後熱を出して寝込み、回復した後は二度と「家のあったばしょにはちかづ」かなかったという。木樵がどのようなことを“感じ”たかということは具体的に書かれていないが、激しく揺さぶられたらしいことがわかる。女性の側から告げられた別れという形の関係断絶は、木樵に、身体化させるほかは表現の術のない衝動を与えたのだと考えられるし、この結末を書いた書き手にとっても、おそらく書き手自身が感じた動揺はこのような形で表すのがふさわしかったのであろう。このような関係断絶の意味は、次に関係修復の例を検討したうえで、再び考えてみたい。

4. 関係の連続性

関係修復型が多いことは米国に比した日本の（特に日本女子の）特徴である。その1例を挙げる。

反応例3 日本13才女子

（部屋には、女性の着物とお面がある。しばらくすると、禁じ手の女性がそばにたっている。）「あっ、ず、ずいぶん早かったですね」きこりがたずねると「みてしまったのですね」女の人はいいました。きこりは「はい」と小さく答えました。そしてこうたずねました。「この着物は一体どういうことですか。それにお面まで」女の方は「仕方ありません。すべてお話しします」といいました。「じつは私はこの山の仙人なのです。昔私は悪と戦い勝ったのですが、姿形をうしなってしまったのです。私は着物とお面をきてずっと昔からこの山をまもってきました。」きこりは信じられないという顔をして「そうでしたか」といいました。女の方は「私はこれからこの山をまもっていかなければなりません」というと、きこりは「わかっています。決してだれにもいいません。この部屋をみてしまったおわびもかねてずっと私の心の中にしまっておきます」といいました。女の方はこんどこそきこりは約束をまもってくれるだろうと思い家に返しました。それからきこりは本当にそのことをいわず一生をおえました。仙人のおかげかそのきこりの子孫は一代一代少しずつお金もちになっていき一族幸せにくらしたということです。

この反応例では関係断絶の危機にはたつものの、明確な断絶を体験することはない。女の方が「みてしまったのですね」と言うとき、それは微かにだが木樵への責めを含んでいるようである。この点は反応例2の女性の言葉にも共通する。その後木樵が「小さく答え」という記載から、木樵がある種の“済まなさ”を感じたらしいことは読み取れる。が、その後には禁じ手からの厳しい叱責の言葉はなく、両者の関係は危機感をほらみつつも、続いていく。気まずさを解消するかのように、あるいは自分の“済まなさ”を棚上げするかのように、木樵は禁じ手の隠していたものについて質問をする。その質問には僅かながら逆に木樵が禁じ手に感じる異質性を咎める調子がある。禁じ手の“守り手”としての秘密が明かされ、木樵がその秘密を守ることを約束することで、再び良好な関係が確立され、それどころか、その女性からの庇護は木樵の子孫へ続き、その一族に幸福と繁栄をもたらす。この反応の中には、禁の侵犯を咎める言葉はなく、違反という事実の重大さは緩和あるいは値引きされている。木樵自身の禁侵犯という過失への後悔の念は「この部屋をみてしまったおわびもかねて」という言葉にわずかに示されているのみである。

この反応には、関係の連続への強い欲求がうかがえる。禁じ手の審判者としての性格は弱く、むしろ守り手であることが強調される。そしてこの守り手は、悪との戦いという男性的な面を持ちつつも、禁の侵犯という悪を咎めない。このような反応の心的背景には、土居健郎のいう「甘え」の関係が根本にある。この反応例では関係の連続性が問題になってしているのであると思われる。甘えは根源的に母子相互関係に発する。この母子一体感への欲求、このような一体的な関

係が離れず続くことへの強い欲求が甘えである。この欲求が強固であれば、裁きや断絶といった切断機能が入り込む余地はないことになる。反応例3の守り手たる女性は母性的な庇護の担い手であり、木樵との約束の後も、その一族を見守り続ける。物理的に離れた後も、「約束を守る」という木樵の行為と、仙人の見守りとによって、精神的な関係は続いていると言える。

反応例3は、明確な関係断絶を経ない関係修復の一例である。関係修復の反応が日本に多いことは、上記の甘えを背景にしているということで、了解できる。反応例1の関係断絶が身体化される動揺をもたらしたことも、このような一体感への強力な欲求を前提にしていると考えられる。つまり、禁室の侵犯という行為の後、女性の方から別れていくという結末は、木樵にとっては、甘え続けられるはずという期待を瞬時に断ったことになり、換言すれば木樵は女性に見棄てられたのである。だからこそ、それは木樵に動揺をもたらしたのだと解釈できるのではないだろうか。このような見棄てられは、甘えを基調とした精神風土の中ではなおさら厳しいものとして体験されるはずである。

反応例3について、補足しておく、この反応が13才の女子のものであることを考慮する必要がある。先に述べたように、女子被験者には、禁じ手が同性であるがゆえの複雑さが生じる。この被験者も、男性を主人公として話を進めつつも、同時に禁じ手である女性に同一視している。彼女は子どもとして“甘やかし”を母親に求める一方で、将来母親になる存在としては、理想的な母親になりたいという願望から、自分自身が“甘やかし”のできるやさしさを示したいと考える。そうした二重の同一視から、この反応の独特の曖昧さは生まれている。

先述したように、女子には禁じ手への同一視が見られるために、男子のように禁じ手を、主人公の木樵の対象としてのみとらえることができない。日本の場合は男子があっさり関係断絶反応を示すことができるのに対し、関係断絶は減少してその分関係修復の反応が多くなる。米国において関係断絶反応に男女差がないのは、関係断絶が、裁く者からの追放と認識され、その際、裁く者は一種絶対的な存在で、女性という性を越えているからであろう。

ここまでは、禁の侵犯という行為が、禁じ手からどのように評価され、それがどのような結果をもたらすか、を中心に述べてきたが、禁の侵犯者たる木樵自身が禁の侵犯という行為をどう感じているかについて探してみたい。

5. 罪と恥

反応例1では、追放という結果に対して“悲しみ”を感じていたことがわかる。が、行為についてどう感じていたかについては、はっきりと書かれていない。米国の関係断絶の例をもうひとつ挙げたい。

反応例4 米国12才男子

(木樵は部屋の中に宝を見つけ盗む。もっとたくさん盗もうと戻ってきたところで禁じ手に咎められる。)

She was very angry at him. She had seen some of her gold missing. She told him to return the gold or she would kill him. He had become very crazy and took out his

ax and killed her. That night her spirit came to get him. She said to take the gold back to the house or he would ??? in flames. He listened to what she said and returned the gold. To the day he died he never forgot what happened when he found that house. He could never forgive himself for what he did to the woman. When he returned to the spot where he returned the gold a year later, the house and the gold was gone.

(???は不明部分)

(日本語訳) 彼女は怒った。黄金の一部がなくなっていることに気付いたのだ。彼女は木樵に黄金を返せ、さもないとおまえを殺す、と言った。彼は気がおかしくなっていたので、斧を取り出して彼女を殺した。その夜彼女の霊が現れた。彼女は黄金を屋敷に返しにいけ、さもないと、おまえは(火に入れられてしまうだろう)と言った。彼は彼女の言うことを聞き、黄金を返した。彼は、あの家を見つけたとき起こった出来事を死ぬまで忘れなかった。彼はあの女の人のしたことゆえに、決して自分を許さなかった。1年後彼が宝を返した所に行ってみると家も宝もなくなっていた。(() 部分は、意味を類推して訳した。)

ここでは、木樵は禁の侵犯のうえに盗みも行っている。禁じ手の女性は盗みを責め、殺害という罰の警告を行う。ところが木樵は更に禁じ手を殺害する。He could never forgive himself for what he did to the woman. という表現がなされているところに、木樵の自らの行為に対する罪責感が表されている。forgive oneself という表現は直訳すれば「自分を許さなかった」となる。これにぴったりあてはまる表現は日本語にはないが、逆の意味の表現としては「しょうがない」、つまり他にやりかたはなかったという弁解を、この反応における木樵は行っていない。行った行為を、自分のものとして引き受けているのである。

起こった出来事を死ぬまで忘れなかったという記述で、罪責感が続いたことが推察される。ところで木樵はなぜ、家があった場所に戻っていったのであろうか。「死ぬまで忘れなかった」という重々しい表現がされた直後のことである。軽々しく好奇心で動いたのではないと思われる。罪を、「自己の内に発しながら、謝罪という形で外に向かう」(土居 1971)ものであるとするなら、木樵は、何らかの形で謝罪あるいは償いを行うことができるのではないかと期待して、問題の家を再訪したのではないかと。しかし、そこに家はなく、木樵の償いの欲求は満たされることなく終わる。

さて、もうひとつ、米国の例で、関係断絶の中で恥という感情が問題になっているものを挙げたい。

反応例5 米国12才女子

After the woodsman opened the door, he found the beautiful woman sitting there looking very angry. "You lied to me. Get out of my house ! Now !" The beautiful woman yelled. "But you said not to come into the room and I am a very curious

man,” said the woodsman. “I don’t care ! You broke your promise ! You lied ! Now get OUT ! ” screamed the woman. So the woodsman left, feeling ashamed. He walked slowly toward his home and he never went near the beautiful woman’s house again.

(日本語訳) 木樵が戸を開けると、あの美しい女の人が、とても怒った顔をしてそこに座っていた。「あなたは私に嘘をつきました。私の家から出ていきなさい！ さあ！」美しい女の人はわめいた。「でも、あなたはこの部屋に入ってはいけないと言った。私は好奇心の強い男なんです。」と木樵は言った。「そんなこと知ったことじゃないわ。あなたは約束を破ったのです。嘘つき！ さあ、出て行って！」と女の人は叫んだ。そこで木樵は、恥じながら去った。彼はゆっくりと家に帰っていった。そして彼は二度とこの女の人の家には近付かなかった。

ここの描かれているのも追放であるが、反応例4とは違いが見られる。ここでは、禁の侵犯者が、feeling ashamedしながら女性のもとを去ったという記述が注目される。しかも、この被験者は、So the woodsman left, with his head down, feeling ashamedと初め書いていたのだが、with his head downの部分を消している。最初の描写では、木樵はこうべを垂れ、悄然として家に帰った様子が、よりはっきりとわかる。

禁じ手は、「嘘をついた」と木樵を責める。何度も嘘 (lie) という言葉が繰り返される。それに対して木樵のも反駁する。“But you said not to come into the room and I am a very curious man.”という言葉は、意識すれば、あなたは部屋に入ってはいけないと言ったけれど、それではよけい見たくなるものですよ、という日本語になろう。ここには、相手の胸襟に入ろうとする意図、つけいる・くすぐるといった意図が感じられ、それは日本的な甘えの欲求と言えるだろう。

“出て行け”とはっきり言われたとき、木樵は恥を感じつつその場を離れるのである。

Benedict (1954) は日本文化を「恥の文化」、西洋文化を「罪の文化」と呼んで区別した。この思想には既に異論が唱えられているところである。日本にも罪の感情はあるし、西洋にも恥の感情はある。西洋において罪が強調され、前景に出ていることは確かであろう。しかし、Erikson (1950) の指摘によれば、西洋では恥の概念が罪の中に包み込まれてしまっているという。反応例5は、西洋の精神において罪の中にくるみこまれている“恥”の感情を露わにしていると言えるのではないだろうか。木樵と禁じ手のやりとりも互いの感情を生き生きと伝えている。

Piers (1971) は恥の不安に含まれる無意識的なおそれは「見棄てられること」とであるとし、罪の不安の中の「切り取られる」不安と対照させる。そして、見棄てられ体験は早期母子関係に発するものであり、もう一方の「切り取られる」不安すなわち去勢不安は父との関係で生まれるものであるから、恥の発達は罪の発達よりも早期におかれる。土居 (1971) は「恥じる者は、周囲に暖かく包まれないと願いながら、その甘えが満たされない状態で」悩むと述べる。つまり、恥は、甘えたいと思いながらゆるめられない場面で感じられるものだというわけである。反応例5で木樵が恥を感じる前段階に、木樵の甘えを試みる様子が描かれていたことも、このことに重なるように思われる。

土居が「甘えの構造」の中でひいている神学者ボンヘッファーの言葉によれば「恥は人間が根元から離れていることについての口にいひ尽くせない想起である。それはこの隔離に対する悲しみであり、根元との一致に戻りたいという無力の願望である。恥は自責よりももっと根源的なのである」という。根元からの隔離の意味するものは様々に考えられる。母子一体状態からの隔離と言い換えることができるだろうし、甘えがゆるされぬ状態とも言えよう。エデンの楽園からの追放もまた、この根元からの隔離と言えるのではないか。とすれば、「原罪」という概念も、禁を犯して実を食べたために隔離され、再び戻ろうとしてもかなわないということに対する深い恥の気持ちから始まっていると思われる。反応例5の木樵の感情の中にもこのような隔離の悲しみがうかがわれる。「根元との一致」をいかに望もうとも、それは「無力の願望」であり、かなえられない。反応例5の木樵が、二度と家に戻ろうとはしなかったということも、望んでも一致がかなえられない無力さを表していると考えられるだろう。

この点は、反応例2の木樵が二度と家に近付かなかったという記述と共通する。反応例2で描かれていたのも、この根元からの隔離の悲しみであったと思われる。

ところで、このような分離状態を体験したとき初めて、侵犯者にとって、禁じ手が“他者”として認識されるのではないだろうか。逆説的な言い方になるが、関係の断絶は実は、“他者”との関係指向の始まりと言えるだろう。

罪は、外面に向かい、外への行為、つまり償いを促進する。犯した罪は償われねばならない。メラニー・クラインの乳幼児の破壊衝動と償いに関する理論も、この力動に基づく。クラインは、乳幼児はその破壊衝動によってなした破壊行為を罪と感じて抑鬱状態になり、罪を償う努力を続けると考える。それはまさにグリムの「マリアの子ども」さながらである。この物語の主人公の少女は、聖所を開けてしまったために聖母マリアによって天国から追放され、地に落ち、さまざまな苦しみを経験した後、マリアにゆるされるという結末を迎える。反応例1の後にまだ話が展開するとしたら、そのひとつがこの「マリアの子ども」であろう。しかし、実際には米国において、「マリアの子ども」のような関係修復の反応は少なかった。償いということが、非常に困難な道であることがうかがえる。反応例4で、木樵が女性の家を再訪したものの、その家が消えていたということも、償いの難しさを語られると思われる。

償いという行為を通じて再びこの“他者”との関係を修復しようとする努力が開始されるわけである。だが、禁の侵犯という過失に対する処罰という側面が強調されると、この“他者”との距離が余りに遠くなり、もはや関係修復への努力も成り立ちにくくなってしまうのではないか。あるいは“他者”との距離が隔たった結果、その姿が小さくなり、禁侵犯者にとっての問題にならなくなってしまったとも言えよう。“他者”の方からの歩み寄り、あるいは仲介者がなければ、償いという関係指向性の成立の可能性は極めて低い。

日本的な関係断絶においては、処罰がなんら積極的には行われない。禁の侵犯が明らかになったとき既に禁じ手からの赦しはなされているとも言える。ただこの赦しは幸福な安心感に満ちたものではなく、赦されたからこそ、恥そのものは消えないとも言える。「阿闍世コンプレックス」について古沢(1932)は「処罰への恐怖としての子どもの罪悪の意識」が「親のゆるしによって」変化すると述べ、それを「懺悔心」と呼んだ。これは、親への敵意に対する処罰が予期に反して与えられず、ゆるされたとき、子どもが感じる「わるかった」と言う気持ちを指す。ゆるされた

からこそ感じる「懺悔心」は、禁の侵犯がゆるされたときの恥の感情に類似すると思われる。

ところで日本の関係断絶型の中には女性が去っていった後、「木樵は深く反省しました」という表現が多々見られる。「反省」という言葉は日常のなかで多く使われる言葉であろう。頻繁に使われれば使われるほど、本来的な意味の深さを失って、なかば魔術的に、その言葉さえ唱えれば、責めの重さも軽減できるというものになっている。この「反省」という言葉が、根元からの隔離についての認識を曖昧にする。関係断絶は回復不可能な事態として認識されるはずなのに、この言葉ひとつが、たやすく関係断絶を甘えられる状態へと引き戻すのである。「反省」は、上記の「懺悔心」に似たものでありながら、一般的には浅い感情との結び付きしかもたないものになっている。このような「反省」が通用するのは、「ゆるす」側にも、侵犯者の罪悪を受け入れてゆるすという深い感情の動きがなく、罰を与えるか否かという形骸化した機能のみが強調されているからとも考えられる。

6. 禁室と“関係”

最後に、禁室モチーフの意味するところは何かということを考えてみたい。世界の昔話の中で禁室は普遍的なモチーフである。「見てはならない」という禁を犯す、という意味でとらえると、アモールとプシケー型の話とも重なる。

Neuman (1956) は「アモールとプシケー」の分析において、プシケーが姉たちにそそのかされて灯をかがげてエロース（アモール）の姿を見てしまったことを、女性が無意識の暗闇を脱して、意識に向かうこと、女性としての本性の完成に向かうこととして解釈している。光の中にエロースの姿を見ることは男性と個人的な出会いを意味し、そのとき初めてエロースを愛するようになると、Neuman は述べる。ただし、プシケーのかざす灯から落ちた油がエロースに火傷をおわせ、プシケーは愛の対象を喪失する。

禁室というテーマも、上記の解釈と同様に、意識に向かう、すなわち意識化という象徴的な意味を含んでいると考えられる。ただし、この意識化の過程には、自己と他者の両者への傷付けが、必然的に含まれる。

禁室という命令は、なされた時すでに、それが破られる期待が含まれている。被命令者側からすればその好奇心を必ず刺激する巧妙な仕掛けである。言ってみれば、人間にとって禁室は犯さざるを得ないものである。北山修（1982）はこれを「時間がくれば破られるタブー」と呼び、父性的な近親相姦のタブーと対照させる。子どもが母親から個体分離する過程も、避けられない母親への破壊を含む。宗教学者の Buber（1957）は、古典的精神分析を批判して、人生早期の処罰への恐怖に還元される罪悪感のみが存在するのではなく、罪そのものが存在する、そして根源的罪とは、「存在」を傷つけることだと述べた。このような傷つけを、筆者は避け得ない傷つけ、すなわち犯さざるを得ない禁室であると考え。傷つけの結果、「根元からの隔離」が生じる。始まりのときの一致へ戻ることを希望しながらそれがかなわないことに対する悲しみ、すなわち恥が経験される。神学的には、「根元」は神という絶対者を意味するであろう。心理学的には、遡及すれば初めの母子一体状態を意味する。隔離したとき、すなわち孤独の中で初めて、離れてきた源が、「他者」として認識され、真の意味での“関係”可能性が生まれる。

禁の侵犯を“罪”と認識し、その償いを行っていくことは、隔離された他者に再び橋をかけていく主体的な歩みである。罪という概念の中の処罰的な意味合いが強調されすぎると、関係を持つ対象である“他者”との距離が大きくなる。筆者の調査の中で、米国では追放型の反応が多く見られたが、追放を行った“他者”との関係は築かれるのか、どうか。築かれるとすれば、どのような道をたどるのだろうか。この問題は、筆者の調査の範囲を越えている。一方、日本の場合には、関係の連続性に対する期待が大きいために関係の断絶が曖昧になる傾向が強い。関係断絶を引き受けたいうでの他者との出会いが可能かどうかという問題が、注目される。日米ともに、成人を被験者とする調査を行えば、多少ともこれらの問題への接近が可能になるう。

とはいえ、禁室侵犯というテーマは、人間の他者との関係の本質に触れるものである。このような関係の問題は、青年期を終えたときに解決されるという発達上の問題としては片付けられない。むしろ、個人の人生の問題であり、人類史の問題である。最後に、禁室侵犯とそれに続く関係断絶において体験される感情の深さこそが、禁室を犯さざるを得ない存在が変容する重大な機会を与えてくれるのではないか、ということを示唆して、論を終えたい。

引用文献

- 青木真理「昔話の結末にみる心性～日米比較の試み～」京都大学教育学研究科修士論文 1988
Benedict, R. *The Chrysanthemum and the Sword*. C.E. Tuttle Co., 1954.
Buber, M. “Schuld and Schuldgefühle”, Verlag Lambert Schneider, Heidelberg, 1958
土居健郎『「甘え」の構造』, 弘文堂, 1971
Erikson, E.H. “Childhood and Society”, W.W. Norton, New York, 1950
グリム童話集（金田鬼一訳）岩波書店, 1954
河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店, 1982
木村 敏『人と人との間』, 弘文堂, 1972
北山 修『悲劇の発生論』, 金剛出版, 1982
Klein, M. “Love, Guilt, and Reparation” In : “Love, Hate and Reparation with Riviere”, Hogarth, London, 1937
古沢平作「罪悪意識の2種；阿闍世コンプレックス」1932
Neuman, E. “Amor and Psyche”, Routledge and Kegan Paul, Ltd., 1956
Piers, G. and Singer, M.B. “Shame and Guilt.” Norton, New York, 1971
関敬吾編『日本昔話大成』4, 角川書店, 1978

(博士後期課程)